

小学校音楽科における篠笛の学習(5): 伝統音楽の活動における「口唱歌」の創作とその活用

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2019-02-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金井, 公美子, Kanai, Kumiko メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/955

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



小学校音楽科における篠笛の学習⑤

－伝統音楽の活動における「口唱歌」の創作とその活用－

Shinobue Learning in the Elementary School Music Class(Part5) : The Creation and Use of Student Composed "Kuchi-syōga" in Traditional Music Activities

金井 公美子
Kumiko Kanai

1 問題の背景と本研究の目的

平成29年度3月告示の新中学校学習指導要領には「指導計画の作成と内容の取り扱い」の「A表現」(2)器楽の指導のうち(6)に「我が国の伝統的な歌唱や和楽器の指導に当たっては、～適宜、口唱歌を用いること。」と明記した。伝統音楽を重視する傾向は学習指導要領の変遷において、平成10年度からの和楽器の学習の必修化を機に日本の伝統音楽の取り扱いについての期待は高まり、更には2年後の東京オリンピック開催が拍車をかけ、今まで以上に「日本人として」「日本人であるならば」を意識した日本の伝統を重んじる姿勢が求められ、伝統音楽の授業の工夫が求められてきている。過去の教育現場では西洋の音楽に主眼が置かれていたため¹、日本の伝統音楽を今まで軽んじてきた私たちに警鐘を鳴らすかたちで、現学習指導要領に伝統音楽の重視を盛り込み、新学習指導要領でその発展的な改訂を行っているように思う。これからの日本の音楽の方向性は、取りまとめる省庁、それを実践する教師側、受け取る側の児童・生徒や保護者に委ねられているといっても過言ではない。

孔子が説いた「故きを温ねて新しきを知る」は、まさしく過去のことを究明し、それを習熟することで、新しく道は開けるということである。日本の伝統音楽の変遷を知ることは、伝統を重んじること、伝統から学ぶことであり、それを踏まえてそこから生かされることにつながる。知る・重んじる・学ぶ・生かすがループし、今後の新たな発見や工夫につながる。それこそが伝統を次代へ継承し、価値のあるものとして再創造しつづけるものなのではないだろうか。

現学習指導要領では、伝統音楽の篠笛を器楽の授業として組み込んでいるが、その域を出ることは稀である。

近隣小学校での6年間継続している実践²は、器楽の活動として、如何に短時間で篠笛の所作や奏法を身に付けるか、そして、創作活動として、グループで3音によるふしづくりから口唱歌を用いて歌い、覚えたものを演奏する。最終的にグループのふしをメドレーにして、打ち物と掛け声を入れお囃子となる。このような器楽と創作の内容を3時間内で取り扱う実践では、回を重ねる毎に指導内容や方法の改善が求められ、その都度研究の価値が高められてきた。注目すべきは、2回目でふしづくりをしてから、

3回目でふしを覚えるための口唱歌を考える作業が一番難しいと感じられた。薦田 (2018: 2) は、唱歌は、「音色や旋律、リズム (拍、間など)、奏法など、和楽器の音楽に関わる全ての要素が含まれており、それらを丸ごと捉えることが可能」なものであるとし、金井 (2018: 184-190) は、実践の中で、特にオノマトペ (これより擬音語という語で総称) を用いた児童の口唱歌が、音高とフォルマントとの関連が深いことを明らかにした。つまり、児童の口唱歌の分析からは、母音 $i \rightarrow e \rightarrow a \rightarrow u \rightarrow o$ が高い音から順に低い音に向かって使われていたという結果を得られた。

今回は、篠笛の音色や抑揚、音高やふしの流れ、うち指の有無などの変化を読み取ることで、児童がどのような唱歌選びの過程を踏んでいるのか、授業者である学生と児童の行動を録画と録音から分析検証し、今後の指導法に役立てることを目的とするものである。

1-1 篠笛を用いた授業実践例

前述したとおり、学習指導要領では伝統音楽の篠笛を用いた授業を器楽で学習する。

以下は、実際に横浜の中学校で篠笛の授業を行っている卒業生の授業内容である。

表1のように中学校第1学年、男子19名、女子19名の合計38名による授業であり、「我が国や諸外国の音楽の特徴を感じ取り味わおう」という主題で行われている。授業の内容は、主に、篠笛の歴史を学び、音を出し、篠笛の音色と奏法を知る。そして3年間で理想の音色の追求ができるような学びにしている。つまり、これまでの伝統的な演奏に重きを置いて、なるべく篠笛を身近なものとして感じられるような楽曲を用い、3年かけて音色や奏法の工夫について学ぶ。この内容は、前述した表現領域の器楽の指導内容にもあるように、表現活動の器楽の域を越えていない。ここでの伝統音楽の指導とは、その笛の所作や音色の提示にある。つまり、指導者はできるだけ本格的な篠笛の音色を身に付けて生徒に音色を感受させるところに重きを置いているということだ。この卒業生は筆者が6年間継続している近隣小学校と大学生とが協働で参加する例大祭のお囃子演奏で、はじめて篠笛に触れ、これを機に中学の教員になってから本格的に篠笛を習い授業で役立てているという。その篠笛の教習時も、数字譜による口授法であったため、自らも数字譜以外の口唱歌はまだ取り入れていないということだ。

この例からも、一般的な篠笛の授業は器楽としての活動であり、表現領域による観点1 (音楽への関心・意欲・態度)、観点2 (音楽表現の創意工夫)、観点3 (表現の技能) の3評価の授業が主流である。また、中学1年生から3年間の実践を経ても、生徒が理想とする音色までたどり着くのはなかなか困難であるという。

表1 横浜市K中学校 (卒業生) による篠笛授業の略案

授業テーマ	「我が国や諸外国の音楽の特徴を感じ取り味わおう」		
参加者	(指導者) 卒業生1名	第1学年男子19名、女子19名	合計38名
1回目授業実施案	2回目授業実施案		3回目授業実施案
<ul style="list-style-type: none"> ◎ 篠笛の基本奏法を知る ○ 篠笛で音を出してみる ○ 立ちの所作を覚える <ul style="list-style-type: none"> ○ ㊸㊹の指使い ○ 《とうふ屋さん》を演奏する (1行1息のルール) 	<ul style="list-style-type: none"> ◎ 篠笛の造りと歴史・音色を知る ○ 《晩鐘》を鑑賞し、音色の違いを知る <ul style="list-style-type: none"> ○ 造りと・歴史について学ぶ ◎ 篠笛の奏法を覚える「指うち」 <ul style="list-style-type: none"> ○ 基本奏法を復習する ○ 《たこたこあがれ》を演奏する 		<ul style="list-style-type: none"> ◎ 篠笛で《とうふ屋さん》《たこたこあがれ》を演奏する ○ 1人から2人で2曲から1曲を選び発表する (実技試験) ○ 発表を聴き、互いにアドバイスし合う ○ 1年次の篠笛の授業を振り返る

1-2 H 小学校篠笛授業内容と改善点

前年度に引き続き、大まかな流れは変えず、2回目のふしづくりと3回目の口唱歌創作に時間をかけられるような改善を図った。

1回目 これまで、㊦㊧の音のみで《たこたこあがれ》を吹く内容であったところを、㊦㊧㊨の音を用いて「なべなべそこぬけ」に挑戦した。

2回目 個人のふしを尊重しながら、グループのふしづくりすることで、グループ間の話し合いが思うように進まないグループは個人のふしを流用できるように配慮した。

3回目 口唱歌の擬音語選択において、音高とフォルマンの関連性を元に雅楽や能、篠笛の唱歌から抽出した擬音語を表にし、それを元にして聞こえる音を擬音語に変換するための作業をやすく工夫した。

以下に、2018年度の授業内容について記す。(薄網掛けは今回の改善点)(濃網掛けは主要研究)

表2 2018年度の授業内容と改善

授業テーマ	「皆で楽しもう～オリジナルのお菓子づくり！」		
参加者	音楽教育コース3年+大学院生(指導者10名+2名)		
	1回目授業実施案	2回目授業実施案	3回目授業実施案
1) あいさつ&自己紹介と模範演奏(5分)	・篠笛のイメージについて(お祭り) 2) 篠笛の吹き方を学ぶ(10分) ・篠笛の向きと指の押さえ方 ・唇の当て方を模型を用いて説明 ・息の吹き入れる方向と量 3) 音だし(ロングトーン)(5分) ・リコーダーと篠笛の音色の違い ・唱歌㊦㊧㊨(イ・ム・ナで歌う)と運指の確認	1) あいさつ&吹き方の復習 ㊦㊧㊨の音(10分) ・《なべなべそこぬけ》の復習 ・打ち指の有無の聴き比べ ・打ち指の練習 2) 8拍分のふしづくりの説明とふしづくり(15分) ・個人でカードを用いて4拍のふしをつくる ・児童間で話し合い、グループで8拍のふしづくり ・記述したものを音で表現(教師側) ・教師の真似をして吹く練習 3) 発表唱歌㊦㊧㊨(イ・ム・ナで歌う)の後演奏(3分)	1) あいさつ&㊦㊧㊨の吹き方と打ち指の確認(3分) 2) 口唱歌の説明と例の提示(2分) 3) グループのふしに口唱歌の創作(15分) ・児童の感性で擬音語を用いて創作 ・打ち指を入れる位置を確認 3) グループごとに唱歌を発表し、演奏(3分) 4) 太鼓を入れてお囃子体験(2分) 5) 法被を着てグループごとのお囃子を演奏(4分) 6) 打楽器とかけ声を入れて合奏(4分) 7) まとめと次回の予告 「地域の祭りへ繋げよう」(2分) 8) アンケート記入/篠笛の後片付け(10分)
4) 基本的奏法の確認(3分)			
5) 《なべなべそこぬけ》の練習(10分)	5) アンケート記入/篠笛の後片付け(10分)		
6) まとめと次回の予告 篠笛の音色の特徴と出し方/ふしづくり(2分)			
7) アンケート記入/篠笛の後片付け(10分)			

2 口唱歌の創作

2-1 口唱歌からみたフォルマントと音高の関連

拙著 (金井 2017 : 182-187) のフォルマントと音高との関連性についての結果を受け、雅楽や江戸囃子などの唱歌にもそれが当てはまるか分析を試みる。

譜例 1 平調《越天楽》吹物の唱歌の楽譜
(唱歌で学ぶ日本音楽 2018:31)

楽譜作成 : 中村仁美

譜例 2 五線譜による平調《越天楽》吹物の唱歌
(唱歌で学ぶ日本音楽 2018:34)

採譜・構成 : 黒川真理恵・大場陽子 監修 : 中村仁美

(雅楽から箏築と龍笛の唱歌を参考とした)

表 3 雅楽《越天楽》箏築・龍笛の唱歌の分析 (表 3.4 の 16 拍目までを分析)

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	i		a		o	o	u	o
箏築唱歌	チ	ー	ラ	ー	ロ	ヲ	ル	口
音高	d	↗	e	↘	h	→ h	a	↗ h

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	a		a	u	a		a	
箏築唱歌	ラ	ー	ア	ル	ラ	ア	ア	
音高	e	→	e	↘ d	↗	e	→ e	→ e

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	o		a		o	o	u	o
龍笛唱歌	ト	ー	ラ	ー	ロ	ヲ	ル	口
音高	d	↗	e	↘	h	→ h	a	↗ h

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	a		a	o	a		a	
龍笛唱歌	ラ	ー	ア	ロ	ラ	ア	ア	
音高	e	→	e	↘ d	↗	e	→ e	→ e

譜例3 《江戸囃子》篠笛の唱歌

(唱歌で学ぶ日本音楽 2018:103)

	前ビ	起	地	起頭	後	終	終
一	チ		ト	チ		チ	
二	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	チ
三	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ
四	オ	ト	ヒ	ト	ヒ	オ	ト
五	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ
六	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ
七		ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ	ヒ
八							

譜例4 《江戸囃子》「投合」をもとにした唱歌

(唱歌で学ぶ日本音楽 2018:106)

前号では音高とフォルマントの関係性が高い方から $i \rightarrow e \rightarrow a \rightarrow u \rightarrow o$ の結果を得た。それを元に、五線譜による雅楽の唱歌と比較分析すると、高い確率で音高と母音の関係があてはまっていることが明白である。つまり、表3の網掛け部分において、箏築1段目3,4拍目の唱歌ラのa母音から5,6拍目の唱歌ロラのo母音への移行は音高がe音からh音に下行している。また、2段目1,2,3拍目の唱歌ラアのa母音から4拍目の唱歌ルのu母音に向けて音高がe音からd音に下行し、更に5,6,7拍目にかけて唱歌ラアのa母音に変化し、音高をe音に上行している。この方法で網掛け部分は証明される。

また、箏築では当てはまらなかった1,2拍目も龍笛の唱歌には当てはまっている。

譜例5 能管の〈早笛〉の唱歌

(唱歌で学ぶ日本音楽 2018:64)

イ	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	1
	ヒ	ヒ	ー	リ	ー	ヒ	ヒ	2
ヒ	ウ	ウ	ヒ	リ	ー	ウ	ウ	3
ラ	ラ	ラ	ヒ	ト	ラ	ラ	ラ	4
ラ	ラ	ラ	ウ	ヒ	ラ	ラ	ラ	5
ウ	ウ	ト	ー	ト	ト	ウ	ウ	6
ラ	ラ	ウ	ー	ウ	ウ	ラ	ラ	7
ラ	ラ	ロ	ロ	ロ	ロ	ラ	ラ	8

表4 「投合」をもとにした唱歌の分析

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	i	ai	ai	o o	o	u	a	
篠笛唱歌	チー	ハイ	ハイ	トロ	トー	ヒュー	ヒヤ	ー
音高	b ↘	a →	a ↘ e ↘ d ↗		e ↗	g ↗	a ↘	

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	o	u	a	ie	ai	o	o	
篠笛唱歌	ト	ヒュー	ヒヤ	ヒエ	ヒヤ	イト	ロー	
音高	e ↗	g ↗	a ↗ c ↘ h ↘		a ↘	f ↘	e	

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	i	i i	ai	o o	o	a	i	
篠笛唱歌	チ	ヒリ	ハイ	トロ	トー	ヒヤ	ヒ	ー
音高	e ↘ c ↘ h ↘		a ↘ f ↘ e ↗		a ↗	h ↗	c ↗	

	1	2	3	4	5	6	7	8
フォルマント	i	i	a	ie	o	a o a		
篠笛唱歌	チ	ヒ	ヒヤ	ヒエ	オ	ヒヤオ	ヒヤ	ー
音高	e ↘	d ↘	c ↘ b ↘ a ↘		g ↗	a ↗ g ↗	a	

さらに「投合」を元にした唱歌の分析では、フォルマントと音高の関係性が高い方から i→e→a→u→o であり、白字部分の1カ所のみ（最下段3、4）が不適合であった(表4)。

以上、それぞれの唱歌の擬音語には特徴があるが、音高とフォルマントの関係性については実証されたため、児童に提示する擬音語をそれぞれの口唱歌から抽出しまとめた。また、同じ管楽器であるが、喉があるために複雑な音律が生まれる楽器、能管（譜例5）からも抽出した。

ラ行 雅楽の箏・龍笛、能管、篠笛

ハ行 能管、篠笛が主

タ行 雅楽の箏・龍笛、能管、篠笛

ヒヤ行 能管、篠笛

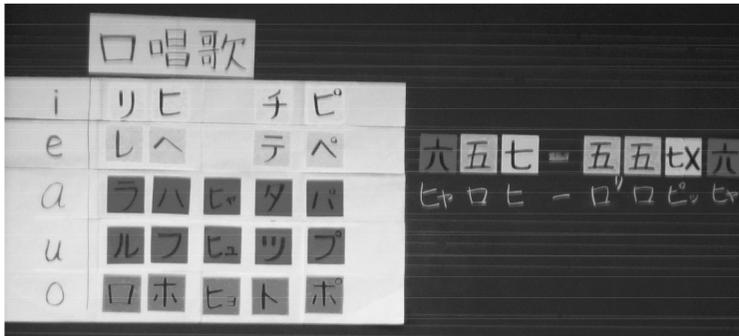
パ行 昨年の児童が好む唱歌より選択（しょっぺ・しゅっぽっぽ等）

2-2 口唱歌の選択の工夫

授業内ではまず、授業者である学生が、口唱歌を作成するため、音高やふし回しに相当する唱歌の例を掲げた(写真1)。音高の五（青色）、六（赤色）、七（黄色）、また母音i列（黄色）、e列（ピンク）、a列（赤色）、u列（青色）、o列（緑色）のようにそれぞれ色分けしたカードを掲示している。

例として掲示し、唱えながら奏した「ヒヤロヒーロリロピッヒヤ」はこの表から音高の上下、うち指の特徴を強調した形で児童に模範演奏している。

写真1 口唱歌を作成するための擬音語の表と口唱歌の例



その他にも、口唱歌の可能性を探るため、いくつかの例を用いて児童に提示している。

ちびまる子ちゃんの歌にある、「ピー↘ヒャ↘ラ、↑ピー↘ヒャ↘ラ、↑パッ↘パ↘パラ↑パ」や、擬音語としてよく耳にする救急車の「ピー↘ポー、↑ピー↘ポー」のように高さの違いを身近な経験の中から感受できるよう工夫した。

2-3 参与観察とその過程

まずは、指導者である学生を一人ずつ配置した児童5～6人のグループで口唱歌の言葉選びを行う。

そこでは、あくまで、学生があらかじめ自分で考えておいた唱歌を念頭に置き、児童の作る唱歌に助言をしながら引き出していく。

表5の口唱歌はあらかじめ学生達が小学生のふしに口唱歌を当てはめ、授業のために準備し、小学生の口唱歌作成のヒントに用いたものである。実際のやりとりの中ではうち指の部分に次のような言葉を考えている。トト→ト^ロト、ヒャヒャ→ヒャ^リヒャ

表5 学生が作成した口唱歌の例

(A班)

1	2	3	4	5	6	7	8				
六	五	五	七	×	六	六	×	七	六	六	×
ヒャ	ト	ト	リ	×	ヒャ	ヒャ	×	ビ	ヒャ	ヒャ	×

この表から読み取れることは、2点である。

- ① 2回出てくる前半の⑥をトからりと音高を意識した口唱歌に選択し、後半は休みにつづく⑦で短く鋭くの表現を意識していること。
- ② 2回の⑥⑥は、実際に音価が異なるが、同じ「ヒャリヒャ」を用いていること。ここに吹き方の違いを感じさせるこだわりは持っていない。

下記のA班の学生と児童のやりとりについては、質的研究として参与観察を行い、双方の言語活動を記す。

表 6 口唱歌作成の過程

(㊟=指導学生 ㊦㊧㊨㊩㊪=児童)

言語活動		
㊟	今日は、みんなが作ってくれた節に口唱歌をつけます 口唱歌って何ですか	
㊦	良く聞こえなかった	
㊟	そう、聞こえなかった？ 口唱歌は、みんなの作った節に音があるでしょ？ それに言葉を当てはめていくのを口唱歌というね それを歌って、節を覚えやすくします 黒板に貼ってある表をヒントにして言葉を当てはめるよ そして、言葉をつけて覚えていきます いい？OK?	
全員	うん	
㊟	1回吹くので、どんな言葉が当てはまりそうかなと思って聞いてね (節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ / × ㊪ / ㊫ / ㊬ / × / これが前回みんなが作ってくれた節ね 1回聞いただけではわからないから何回も吹くね じゃあ1から4の半分までを吹くのでどんな言葉が入りそうかなって いうのを考えてね (節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ / ゆっくり吹くね (節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ / 何が入りそうかな？ え～？う～ん？	①
㊦	最初はハがいいな	
㊟	ハがいい？そうだね。あの表の中でもリやヒって高く聞こえる だけど、この節って㊦の音から始まっているから 真ん中の赤やピンクを使えるときれいになるよね。 じゃあ、最初ハから始めよう	②
㊦	ハで、次は㊧？	
㊟	ハから始めて、残りの音はどうなるかって聞いていてね (節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ /	
㊦	次はロかホ	
㊟	ロ？どう聞こえる？(つなげて)ハーロー じゃ、ハーロー？うち指はいつているから、ハーローロー？ (節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ / 3回吹く ハーロー ¹ ロ、ハーロー ¹ ロ	③
㊦	ピッ	
㊦	ピッ、ピッ	
㊦	ピッ、なんか丸をつければ高そうな音になるから	
㊟	そうだね、じゃあピッにしようか (節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ /	④
㊦	ハがいいんじゃない？	
㊟	(節を吹く)せーの！ ㊦ / ㊧ ㊧ / ㊨ × / ㊩ ㊩ /	
㊦	(聞きながら)ハー ¹ ハー(と歌う)	
全員	(一人が)ハーロー ¹ ロ(と歌い出した後にみんなも)ピッハー ¹ ハー(と同調し歌う)	⑤
㊟	ハー ¹ ハーにする？そうだね、1回吹いてみるから、みんな歌ってね 聞こえる？	
㊦	うん、聞こえる	⑥
㊟	聞こえる？じゃあ、後半も作ってみよう。後半を吹くね (節を吹く)せーの！ × ㊦ / ㊧ / ㊨ / × / (数回繰り返し返す)	
㊦	ブ？	
㊟	ブ？	
㊦	リ？ーラ ¹ ラー	⑦
㊟	おっ、リ、ラー ¹ ラーいいね、聞こえる？ (うなづく)	
全員	イ、ラ ¹ ラー？ リ、ラ ¹ ラー	⑧
㊟	じゃあ、練習してみよう。 え？どっち？ リ、ラ ¹ ラー	
全員	せーの！ハーロー ¹ ローピッハー ¹ ハー×リ、ラ ¹ ラー できた	
㊟	×のところ難しそうだね、お休みだから×リね。 (ドンドンと太鼓の合図で話し合い終わり)	⑨

2-4 分析

上記の観察から言語活動及び録画から行動の分析を行った。

分析① 授業者である学生は、吹き始めに必ず、「せーの！」と掛け声をかけてふしを吹き始めている。

この掛け声は、児童に自然な形で拍を感じさせ、一人の児童が拍毎に首を上下に振る様子が見られた。他の児童も同調して振り始めた。ここから、児童の行動の広がりが見られる。

分析② 唱歌の表には、母音毎に色分けがされており、前号でのフォルマントと音高の関係を反映させた表となっている。ここで、学生は、㉖の音にふさわしい色分けを真ん中の赤かピンクと確認させている。それにより、児童は㉕㉖㉗の真ん中の㉖を再認識し、次は低い音の㉕なので、ロカホという選択をした。また、ハーローと歌い、ハ行とラ行を繋げる選択をした。ホーは一度も歌われなかった。

分析③ ここで、学生が自らうち指だからハー¹ローと提示した。ここは、児童に気付かせたいところでもあったが、結局このうち指の示唆が次の機会に生かされる結果となった(⑤)。

児童は口唱歌を作り始めてから自主的に何度も繰り返して口ずさみ、その感覚を喜ぶような顔つきに変化してきた。

分析④ 学生が3回同じように吹いたことで、その音を記憶したのか、児童㉗と㉘は次の音もピツに聞こえると、他の児童の顔をのぞき込み同調を求めた。その結果、ヒとピの違いについて、児童㉙は丸をつけると高く聞こえると理由付けをしている。このような気付きに対して、学生が勢いよく肯定したことで、児童が自信を持ち、児童全体が積極的に活動するような変化が見られた。

分析⑤ ③の学びを元に、児童㉗がうち指の口唱歌を唱えている。ここでは、全員が同調し、㉗を中心として作成したふしを最初から歌い始める。すると、途中から他の児童も一緒に歌い始め、前半のふしを歌いきる。学生からはもう一度歌おうという声かけも無く、児童自らが自主性を持って歌っている。その後で、学生が確認のために全員でもう一度歌うように指示を出すと、児童の身体が前のめりになり、口唱歌を声を合わせて大きな声で歌った。

分析⑥ 笛の音色が自分たちの作成した口唱歌通りであることに大きく頷きながら、身を乗り出して自信に満ちた返答をする。

九

分析⑦ 3拍目にある同じ㉚の音との違いは、後拍にはいるために児童の感じ方が違うようだった。そのため、違う擬音語も選択肢にあがった。プがあがったのは、口唱歌の歌い方のニュアンスを少し変えたいという意志の表れである。×リラ^リラを学生が肯定したことで、この意見にまとまりかけている。ここで、なぜこの擬音語を選択したのか、児童の感じた言葉を引き出すことが必要となる。

分析⑧ しかし、児童達が口々にイかりかの選択を始め、全員の意見を確認しようとしている。そして、3拍目のピツよりも柔らかい感じであるイ母音の長いりを選択した。リイという、少し柔らかい感じを表現することで皆の同意を得た。

分析⑨ この部分は後拍から音が入るため、児童の息が合わず、歌うことが困難だった。時間的な制約があり、練習が定着することはなかった。学生は「×りね」と念を押したが、まだ釈然と行かない顔つきをしていた。ここでは、ンリと歌わせたり、手を打たせたりする工夫にまでは至らなかった。

これらの分析から、児童が積極的に口唱歌の音高とうち指に見合う擬音語を選択していたことが明らかとなった。また、学生の声がけに対して思考する場面が多く、児童間で判断し、自ら歌ってみるという行動パターンが多く見られた。「思考・判断・表現」の活動が口唱歌創作の中にもあり、「主体的・対話的で深い学び」の充実につながっていたと推察される。

このようにして A 班の口唱歌が出来上がった。

表7 児童が作成した口唱歌

(A班)

1	2	3	4	5	6	7	8
六	五	五	七	×	六	六	×
ハ	ロ ^ろ	ロ	ピツ	×	ハ ^ハ	ハ	×
					リ	ラ ^ラ	ラ
							×

2-5 児童のアンケートと学生の学び

(1) 児童のアンケート

- ・口唱歌を考えるのが難しかったけれど楽しかった
- ・口唱歌で歌ってから吹くと少し吹きやすかったので、前よりも上手に吹けて楽しかった
- ・口唱歌が最初何かわからなかったけれど、作ってみたら楽しかった
- ・吹くのは結構難しかったけど口唱歌を考えるのが楽しかった
- ・口唱歌を使うことでできなかったことができたように感じた
- ・班のみんなと言葉を作って書くのが楽しかった

以上の声からも、口唱歌を思考しながら作成することの楽しさ、さらに、「覚えて吹く」ことによって「吹きやすい」「上手に吹けた」という意見が多く、口唱歌が児童の技能に生かされ、時間的制約がある中でも口唱歌のメリットを実証できたといえよう。

また、口唱歌を選択する上で、擬音語の音の高さについてのアンケートからは、高いと感じる擬音語がリヒピツベ、低いと感じる擬音語がツプテヘホボトロのように、学生の説明も含め、児童の感覚に音高と擬音語の選択が根づいたと考えられる。そのうち、高く感じる母音は i で 94%、低く感じる母音は o で 86% が選択し、口唱歌創作に大きく影響しているとみることが妥当であろう。

(2) 学生の学び

学生には、グループ活動において、自分以外の授業録画の分析を行うよう指示し、自身の指導と比較

し、振り返りができる形をとらせた。

この実践が始められた6年前に比べると、回を重ねる毎に指導の工夫や提示物が加わり、多くの情報を要する実践となってきた。学生は、時間的な制約があることで、失敗を何度か繰り返しながら必要最低限の情報を如何に確実に児童に理解してもらうかということについて試行錯誤し、指導内容や方法を精選するようになった。児童の集中力が途切れる前に、児童に飽きさせない工夫を入れた指導を考案していく。自分の足りない言葉を他の学生から学び模倣し、自分なりにアレンジするような指導法を見出し、1回目の授業よりも2回目と回を重ねる毎に無駄な部分がそぎ落とされていくような内容となっていた。

学生の反省からは、言葉がけの重要性について述べているものが多く、児童のやる気を引き出せず、学生が主体的に進めてしまっているケースもあった。

児童の口唱歌創作から口唱歌演習においては、「理屈で理解せず身をもって体験しながら何となく理解していくことも重要なのではないか」「常にふしのイメージをもちながら考えさせる必要があると感じた」との感想もあった。これは、学生が何度も繰り返しふしを吹き、どんな風に聞こえるかを問いかけて進めることで徐々に出来上がっていった様子からうかがえる。説明が先行しすぎて、児童の集中力が途切れてしまうケースになることも危惧していた。また、「うまく自分で演奏できない児童へは教師側の模範演奏が欠かせないことが分かった」と、これから教育実習に向かう学生の有効な学びの場となった。

児童とのコミュニケーションについては、口唱歌創作だけにとどまらず、授業全体を通して、児童の実態を把握し、様子を観察した上で、進度の遅い児童にも寄り添いフォローをすることで、児童との距離が縮められることを実感していた。ともすると、積極的に発言する児童を中心に活動しがちである。しかし、進度の遅い児童への声かけをすることで、児童間、教師間の雰囲気もよくなり、双方の信頼関係があることが確実に学習意欲や成果に繋げられることを学んだ。

3 まとめ

今回の篠笛実践の一連の活動を「学びの活動」として可能にするには、①上手な手本と適確な説明②提示物の工夫や遊び心のある教具の開発③指導する側の学生の声かけが必要である。

口唱歌の効用や用途については記憶の便と教習や稽古の便³であることは言うまでもない。つまり、「イマ・ココデ」の教習に外ならない。徳丸(2018:4)は、これを第一次口頭性と表し、時間と場所の共有であるという。そして、西洋の楽譜による書記化や録音、電話など今ここにいない場合の伝達方法など、録音技術を用いて伝えることを第二次口頭性と呼び、「イツデモ・ドコデモ」と表している。

第一次口頭性については、分析にもあったように、同じ㊦の音をピとりのように表し方が異なる。この音の伝え方が、まさに「イマ・ココデ」でしか伝わらない微妙なニュアンスの伝承である。「ピツ」と勢よく息を飛ばすように、そして高い音をイメージしながら出すものと、「×リ」のイ母音に重心をおいて長く、柔らかく次に繋げるように表現するなど、全く違う奏法を選択していることは、例えば楽譜から読み取るには無理があることが実証された。うち指の指をピオンと打つ奏法でも、児童から独

特のこだわりを感じることができた。例えば、学生は2回の⑥⑥（厳密には音価が1回目より2回目倍）をヒヤリヒヤと同じに考案したが、児童は1回目をハイハー、2回目をラリラーのように思考した。児童は感性が鋭く、音価や前後のふしの関連によって変化を加え、それに相応する擬音語を選択したいという考え方が顕著であった。

日本の伝統音楽では「演奏法の特徴や音色が根本的な要素と考えられて、それらが特定の言葉で表されて」（徳丸 2018：4）きたように、楽器毎に異なる独特な唱歌が使われている。今回の試みは、唱歌の創作を行うという実践において、楽器毎の異なる唱歌が用いられているが、管楽器に属する箏や龍笛、能管の唱歌の擬音語もすべて含めて考えてみようというものだ。実際に、吹いてみると、児童はなるほどそう聞こえる、と納得しながら自分たちの創作したふしの口唱歌を口ずさんではまた吹く活動を繰り返していた。一つ一つの微妙な音の長さや強さなど、自分が一番吹きたい音色や奏法に近づける行程を楽しみ、かつ学びを得た。

薦田 (2018：2-3) は、唱歌を学ぶことのメリットについて以下の10点を挙げている。

- ①和楽器の音楽や演奏法を、平易な方法で実践的に学習できる。
- ②音楽の多様性を学べる。
- ③諸民族の音楽理解の入り口になる。
- ④楽譜の見方が広がる。
- ⑤日本の伝統音楽の本質の一つでもある、言葉と音楽との関係や融合性を学べる。
- ⑥学校に楽器が無くとも、唱歌を用いることによって、一斉指導が可能である。
- ⑦伝統的な伝承方法を通して、学習方法の可能性が広がる。
- ⑧伝統的な歌唱の学習にも有効である。
- ⑨創作への応用が可能である。
- ⑩鑑賞への応用も大きな効果がある。

この中で、今回の研究でとりあげたものが⑨であり、①②④⑤⑥⑦⑧が⑨の学びの根幹を成す学びとしてあげられる。

⑨の口唱歌創作は、薦田も「お囃子づくり」への応用が可能と考えており、授業に積極的に取り入れ、体験型学習として児童の自発的な発想を引き出す授業を薦めていくことが望ましい。なぜならば、児童の多くが口唱歌創作に楽しみと思考・判断・表現を中心とした深い学びを持つことができたからである。

新学習指導要領にある①「基礎的・基本的な知識・技能の習得」②「これらを活用して課題を解決するための思考力・判断力・表現力など」③「主体的に学習に取り組む態度」は今回の口唱歌演習において、学力の3つの要素を養える格好の実践であったことが明白となった。

今後の課題としては、口唱歌創作の際の学生の声かけが一つの鍵となろう。児童のやる気を引き出すための言葉かけや、その擬音語を用いた際の根拠を児童から引き出すことが大切である。ただし、学生の学びにもあったように、これを感覚的に捉えるということも伝統音楽においては重要である。

また、アメリカでも重要視されているクリティカル・シンキングのスキルを意識した学習法を口唱歌

創作などに導入したいと考えている。今後、この手法を取り入れることにより、コミュニケーション能力や課題発見・解決などの育成・習得を図っていきたいと考える。

注

- 1 金井公美子 2016「小学校音楽科における篠笛の学習④－伝統音楽における「口唱歌」の意義と教育的効果について－」『洗足論叢』第46号 177にて
- 2 金井(2013・2014・2106・2017)にそれぞれの年次の篠笛指導実践の詳細を記している。
- 3 田邊史郎によると、「〈唱歌〉の効用もしくは用途として第一にあげられるのは記憶の便である。～第二に教習や稽古の便をあげることができる。」とある。

引用・参考文献

- 金井公美子 2013「小学校音楽科における篠笛の学習①－地域のお囃子との結びつきを展望して－」『洗足論叢』第42号 73-74
- 金井公美子 2014「小学校音楽科における篠笛の学習②－小学校授業実践と地域のお囃子との関連」『洗足論叢』第43号 61-74
- 金井公美子 2016「小学校音楽科における篠笛の学習③－アクティブ・ラーニングの視点から考える地域のお囃子実践の考察」『洗足論叢』第45号 33-48
- 金井公美子 2017「小学校音楽科における篠笛の学習④－伝統音楽における「口唱歌」の意義と教育的効果について」『洗足論叢』第46号 177-191
- 薦田治子 [他] 2018「唱歌で学ぶ日本音楽」『日本音楽の教育と研究をつなぐ会』2-3
- 田邊史郎 1984 吉川英史監修「邦楽百科事典 唱歌の項目」『音楽之友社』516-519
- 徳丸吉彦 [他] 2018「唱歌で学ぶ日本音楽」『日本音楽の教育と研究をつなぐ会』4-5
- 日本音楽の教育と研究をつなぐ会編纂 2018 「唱歌で学ぶ日本音楽」12-115
- 文部科学省 2011『言語活動の充実に関する指導事例集』第1章言語活動による基本的な考え方より
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/gengo/1300857.htm(2018/8/1にアクセス)

